

埼玉・県立 **浦和高校**

3回の論文作成を通じて 知的探究心と論理的表現力を育成

取材・文／藤崎雅子



≫実践ノウハウ

- 2年間の総合学習で3回の論文作成
- 進路指導や総合学習の内容は年次団主導で柔軟に改善
- 二者面談を年3回以上実施する個別フォロー

埼玉県立浦和高校は、110余年の歴史をもつ男子校だ。県内随一の進学校として知られ、ハイレベルな授業や「第一志望はゆずらない」という方針の進路指導には定評がある。

一方で、「知・徳・体」に調和のとれた人間の育成を図る」「常に10年後、20年後を見ずえて21世紀の真のリーダーを育成する」という2つの教育理念があり、「二兎だけでなく三兎を追え」と部活動や学校行事も盛んだ。進路実績の向上と全人教育の実現は、相反するものではなく相互補完的なものと捉え、その両立に努めている。

2000年からは「興味ある学問を深く追求する」ための単位制を導入し、総合学習を他校に先駆けてスタート。長期的視点に立つて社会を支えていく力を育成しようと、キャリア教育の推進に取り組んでいる。

総合学習を基盤とし 講演会や大学聴講で視野拡大

同校のキャリア教育の基盤と位置づけられているのが「総合的な学習の時間」だ。1年次は1単位、2年次は2単位設定されており、「進路ガイダンス」「学習カウンセリング」「論文指導」の3つの要素で構成されている。

「進路ガイダンス」は、自己と他者(社会・世界)の理解、自己の将来像の形成をねらいとしており、これまでの自分や今後の抱負を整理するワークシートや作文、科目選択や進路に関する説明

会やOB講演会などが主な内容だ。「学習カウンセリング」は自己の将来設計をもとにした高校生活の具体的な目標の設定とその実現のために、担任を中心に定期的な面談を行って個別の状況を把握し、具体的なアドバイスを行うものだ。3つ目の「論文指導」にはとくに力を入れており、読書の習慣と論文の書き方を身につけさせながら、興味あるテーマについての論文作成に2年間で3回挑戦する。

総合学習以外にも、多様な学習機会が設定されており、生徒の進路意識を高め、視野を広げる役割を果たしている。例えば校内においては、ノーベル賞受賞者をはじめとする学識経験者を招いた進路講演会、多方面で活躍する卒業生による講演会が年間計7〜8回実施され、生徒に大きな刺激を与えている。

また、中身ではなく大学名で学校選択してしまうことや、進学後の学習意欲の低下を防ごうと、大学の講義の聴講制度を設置している。希望すれば近隣にある埼玉大学の授業に大学生に混じって参加できる。半年間出席すると浦和高校において単位認定され、さらに希望者には埼玉大学の単位も認定される。通信衛星を利用して、東京工業大学の講義視聴も可能だ。

さらに、国際化の進展する時代に世界と主体的にかかわり貢献していける人材の育成を目的とし、イギリスのパブリックスクールと姉妹校関係を結んでいる。留学制度や交流を通じて、国内にとどまらない進路の可能性拡大に積極的だ。

>> School Data

普通科・男子校 / 1895年創立
 生徒数 / 1096人(男子のみ)
 進路状況(2008年度実績) / 大学 41.6%・
 進学準備 58.4%
 埼玉県さいたま市浦和区領家5-3-3
 TEL 048-886-3000
 URL http://www.urawa-h.spec.ed.jp/

Process
 立ち上げのプロセス

環境変化のなかで
 自校の使命を再確認

10年程前、同校は大きな環境変化にさらされて
 いた。東京都に近い立地から私立中高貫校や大学
 付属校への生徒の流出が加速しており、また数年
 後に迫った完全週5日制や新しい学習指導要領
 施行への対応も必要だった。教員間で「浦和高校の
 使命は何か」を根本から捉え直すという気運が
 高まり、各分掌の主任を中心とした改革構想推
 進委員会が発足。議論の末、同校の教育理念に基
 づく全人教育の重要性が再確認されたという。教
 務部の串田敏男先生は当時をこう振り返る。

「受験に十分対応できる学力の育成は言うま
 でもないが、生徒が社会に出た後リーダーとして
 活躍するためのさまざまな経験をさせるべきだ
 という意見で一致しました」

そうして生まれた改革案が、①単位制導入②
 新しい学習・進路支援体制③多様な学習機会の
 提供を三本柱とする「浦和高校新世紀構想」だ。
 2000年度から単位制に移行。基礎から先端ま
 で幅広い科目を少人数制で展開し、現在の興味
 と将来の必要という観点による生徒の主体的な
 選択が可能となった。それに対応して学習・進学
 指導体制を改革し、埼玉大学聴講制度や各種講
 演会など多様な学習機会を次々と整えていった。

「総合的な学習の時間」はこの「新世紀構想」
 の一環として、新学習指導要領施行に先行して
 2000年度からスタートした。進路指導につい
 ても、3年間の段階的なプログラムを構築。総
 合学習と連動しながら充実が図られてきた。

年次団主体で柔軟に
 手法・内容を改善

「学校改革を行う際、誰が改革の主体を担う
 かが重要なポイント」と、校長の関根郁夫先生は
 言う。同校における総合学習と進路指導の変革
 においては、とりわけ年次団の果たす役割が大き
 いようだ。進路関係の取り組みは、進路指導部が
 主導して各年次におおすというトップダウン方式
 の学校も多い。しかし同校では、年次団の主体性
 が尊重されている。総合学習の企画・運営も、教
 務部とともに年次団が主体となり、進路指導部
 や教科と連携しながら進められている。少人数の
 年次団は機動力があり、生徒の状況に合わせて
 前例にとらわれず柔軟に項目の改廃や変更がで
 き、新たな試みにも挑戦しやすい。

メリットの一方で年次間の接続が懸念される
 が、年度始めに新旧年次間で連絡会が開かれ、前
 年度の実践を検証したうえで新年度にスムーズ
 に引き継ぐ体制ができていた。また、ある年次で
 始めた実践を、必要に応じて進路指導部等の分
 掌が引き取って全年次に拡大実施するケースも
 あるという。

Close up ①
 論文指導

論理的表現力の育成が
 最重要課題

総合学習の3つの要素のうち、中核である「論
 文指導」にスポットをあててみたい。論文指導のね

図1 総合学習「論文指導」の2年間の流れ

| 年(活動単位) | 学習内容 | 分量 | ねらい |
|---------------------|------------|---------------------------|--|
| 1年次 (クラス) | 「モデル研究」 | レポート用紙3枚以上 | <ul style="list-style-type: none"> ●自己を見つける ●自分の関心、志向への気づきを促す ●基礎的な調査・研究の手順を経験させる ●具体的な生き方を考えさせる |
| | 「マイプラン」 | 夏期休業中に原稿用紙5枚以上 | |
| | 「学問研究」 | 原稿用紙10枚以上 | |
| 2年次 (アドバイザーグループ) | 「アドグル論文」前期 | 分量は各アドバイザーグループ(アドグル)により自由 | <ul style="list-style-type: none"> ●クラスを越えた「同好の士」の発見。生徒同士、教員と生徒の結びつきの強化 ●グループ内の切磋琢磨により、論文を読む力、書く力の養成 ●大学進学後や社会に出てからも不可欠な学問的態度や思考方法の習得 |
| | 「アドグル論文」後期 | | |



進路指導部
板谷大介先生



教務部
串田敏男先生



教頭
安食邦明先生



校長
関根都夫先生

「特に『言葉論理的に展開し表現する力』は将来にわたるすべての学問・研究の基礎であり、大学進学を希望している本校生徒が身につけるべき重要課題と考えています」(串田先生)

「『言葉論理的に展開し表現する力』は将来にわたるすべての学問・研究の基礎であり、大学進学を希望している本校生徒が身につけるべき重要課題と考えています」(串田先生)

本格的な論文指導の前段階として、1年1学期は、著名人を一人選んで生い立ちや業績などを調べて共感や疑問も含めてレポートにまとめる「モデル研究」、過去の自分から将来像までを考えさせて作文を書く「マイプラン」を実施し、文章を書くことに少しずつ慣れさせる(図1)。

そして2学期の「学問研究」から、本格的な論文に取り組む。基本的な論文作成方法は、夏休みと4回の授業を使って、『論文の教室』(NHKブックス)という書籍とその内容に沿った10枚のワークシートを進めることで学んでいく。論文テーマは各自が興味ある学問について自由に設定。関連する書籍を3冊以上読み、論文を執筆する。その際、年次団の教員から情報を集めた「推薦図書リスト」が配布される。リストには幅広いジャンルの60〜70冊の書籍が紹介されており、リストを参考にしながら書籍を選ぶことができる。

「言語表現力を磨く第一歩は、たくさんの本を読むこと。高校入試で『問答の勉強に忙しかったためか、生徒の読書経験の少なさに危機感を感じています。まずは図書館や書店に足を運び、きっかけになればと思います」(串田先生)

図2 アドバイザーグループの活動例

| アドバイザーグループのテーマ(例) | 内容 | 募集人数 |
|-------------------|--|---------|
| 医療倫理 | 医療過誤、クローン技術、脳死と移植、障害と人権、インフォームドコンセント、セカンドオピニオンなど、現代の医療をとりまく様々な問題について、倫理的なアプローチを試みる。最終的な論文作成にいたるプロセスとして、新聞記事等を使っての調査・研究・発表を課す | 15名程度まで |
| 城下町 | 現代の主要都市の多くの起源となっている城下町を、現地に赴き調査したり、複数の城下町の比較、過去と現在の比較などをして、その立地、機能、形態から解明する | 8名程度まで |
| ニュース英語に挑戦 | アメリカ・ABC放送の看板ニュース番組の視聴を通じて、生のニュース英語に挑戦する。また、視聴後にトピックに関してディスカッションする。基本的にすべて英語で授業を行う | 5名程度まで |
| 「社会起業家」という生き方 | 今、社会問題の解決をビジネスとして立ち上げる「社会起業家」という新しい生き方が注目されている。「社会起業家」とは何か、世界でどういう人たちがどういうことに取り組んでいるのか(ケーススタディ)、成功する秘訣は何か、自分が起業するならどんなことにチャレンジしたいか、など、各自まとめて発表する。社会貢献やNPO活動等に関心のある生徒対象 | 10名以下 |
| ポアンカレ予想 | 数年前に解決をみたことで話題になった「ポアンカレ予想」について概略を理解し、現代幾何学の発展の歴史を学ぶ。また、それを通して数学とは何かを考える。数学への強い興味・関心が必要とする。毎時間調べたことを発表してもらう | 10名程度まで |

グループ内で生徒同士が互いに高め合う関係に

2年次は前半と後半の2回、クラスの枠を超えた5〜20人程度のアドバイザーグループ(アドグ)に分かれて活動し、論文に取り組む(図2)。ア

図3 論文テーマの例

| 論文テーマ | 所属アドバイザーグループ |
|-------------------------|-----------------------|
| 森鷗外の歴史小説に見るジャーナリズム | 森鷗外の歴史小説を読む |
| デカルト的<懐疑>の否定に関する考察 | 言語と認識を考える |
| イップスは克服可能か? | 心のよりどころを考える |
| 歌舞伎—なぜ「虚構の世界」を楽しめるのか— | 歌舞伎(舞台表現の方法) |
| 剣道と剣術 動作の違いについて | 剣道理論 |
| 原子論は古代哲学者たちの妄想だったのか | ルクレティウスの『物の本質について』を読む |
| 食の美味しさとは何か | 食文化考察 |
| なぜ古代から中世において地動説が否定されたのか | ガリレオと地動説 |
| さいたま市西部の交通の発達と土地利用の変遷 | 新旧地形図による身近な地理学研究 |
| 脳死・臓器移植を認めるべきか | 医療問題 |

ドグルを開講するのは、その時間に授業を持たないすべての教員だ。生徒は希望するテーマを掲げるアドグルに申し込み、グループ活動を通じて個人テーマを設定し、論文を執筆する(図3)。

このような運用に落ち着くまでには、さまざまな試行錯誤があったという。例えば、アドグル論文の回数。総合学習担当の経験がある板谷大介先生は「多様なテーマと仲間と接する機会が多いほうがいい。しかし、過去に3回設定した時は内容が薄まってしまい、2回が適当とわかった」と話す。また、串田先生は自らの経験から「アドグルのテーマはある程度焦点を絞ったほうがいい」と言う。以前、



厳選された20点弱の論文がまとまった「優秀論文集」。配布すると生徒は無言で読みふけるという



「日本書紀」研究」のアドグルでは、メンバーで意見を交わしながら「日本書紀」を読み合わせていく(写真右)。「砂糖の化学」では、実験も交えながら砂糖にまつわる様々なことを研究する(写真左)



自主自立が伝統の同校だが、「学習カウンセリ
ング」をはじめ、きめ細かい生徒フォローの体制が

年3回以上の担任面談に加え 他の教員も連携してフォロー

Close up ② 個別フォロー

完成した論文はアドグル内で相互評価を行う(図4)。また、優れた論文を十数点選定し、「優秀論文集」として配布。教員にとってはこの水準が、アドグルでの指導の目安になる。また生徒にとっては、出来合いのお手本ではなく、「隣で学ぶ○○君がこんなにすばらしい論文を書いた」ということに鼓舞されるようだ。

「社会科学系」という漠然としたテーマを設定したことがあったが、集まった生徒の扱いたい素材がばらばらで、まとまりのある活動が困難だったという。活動内容は各アドグルで異なる。新聞記事スクラップやビデオ視聴をもとにしたディスカッション、フィールドワークなどさまざま。基本的に論文執筆は自宅で行われ、授業ではメンバー全員での活動や意見交換が中心。その点が、個人作業中心の1年次「学問研究」と大きな違いだ。「同じ興味・関心を持つ仲間の結びつきが強まり、切磋琢磨する姿が見られます。他の授業では見えにくい、仲間の興味関心の広さ、経験や知識の豊富さ、視点の斬新さなどが明らかにになり、互いに刺激になるようです」(串田先生)

図4 論文の「他者評価」用紙

平成21年度 2年次総合学習
「アドグル」(他者評価)

評価者 2年(8)組()番 氏名()

《評価する論文の題名》 月死は人の死か。
《論文の筆者》 2年(9)組()番 氏名()

○論文の、次の点について、評価をし、コメントをつけなさい。

| | |
|---|---------|
| 5 | 優れている |
| 4 | やや優れている |
| 3 | 普通 |
| 2 | あまりよくない |
| 1 | よくない |

①主張したい内容は正確に伝わるか。
(5) 4 3 2 1 (当てはまるものに○印をつける)

論文全体を通して「月死と人の死と認めない、気持ちがよく書かれている。

②論拠が十分に示されているか。
5 4 (4) 2 1 (当てはまるものに○印をつける)

筆者自身の意見などはよくわかるが、実際の人たちの声や他の人たちの意見を聞きたかった。少し誤解が欲しかった。

③構成はしっかりしているか。
5 (4) 3 2 1 (当てはまるものに○印をつける)

主張内容についての紹介 → 「主張の裏付けとなる理由」という形に沿って話を、考えられる議論に対してどうすればいいかというものがあつた。

④言葉遣いや表現は的確であるか。
(5) 4 3 2 1 (当てはまるものに○印をつける)

主張をどうと紹介をどうと分けられて適切な表現が使われている。

○感想

文章全体を通して主張が伝わることなく、書き通されているのが印象に残った。自分もこんな論文みたいな主張をしっかりと持てるようになりたいと感じた。

整えられてきた。担任は個人カルテをもとに年3回以上、二者面談を実施。年5〜6回話す生徒も少なくないという。早朝や昼休み、放課後などの時間に、入学後の適応、テストの振り返りや計画などの学習面の相談、科目選択や将来の希望などについて話し合われる。

また、かつて個人フォローは担任が一手に担う傾向があったが、現在は学校全体で組織的にバックアップしている。必要に応じて進路指導担当者や学年主任なども面談を行い、多面的に支援。また、改まった面談でなくても、気になる生徒がいれば担当年次でなくても日常的に声をかける

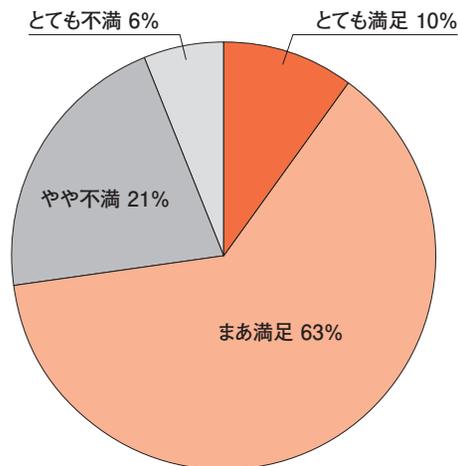
ムードがあるという。教頭の安食邦明先生は、組織で生徒を支えていく必要性についてこう話す。「生徒は以前に比べて多様化していて、担任一人でサポートするのが難しくなっています。生徒に『三兎を追え』と重い負荷をかけるだけでなく、一人ひとりをよく見てフォローしていくことで、それぞれの力を最大限に伸ばしてあげたいですね」

さらに、関根校長先生は独自の「ほめ励ますハガキ」を生徒に渡している。これは、学習や部活動、その他の活動において活躍した生徒、あるいは励ましが必要な生徒に対して、校長先生から贈られるもの。校長室に招いて生徒に直接贈呈した後、



「ほめ励ますハガキ」は部活動や委員会活動等で活躍した者のほか、赤点取得者にも励ましの意味で贈られる

図5 総合学習に対する満足度 (08年度卒業時アンケートより)



いったん回収して自宅へ郵送し、保護者の目にも触れるようにしている。送料は関根校長先生が負担しており、年間2000枚を目安に贈る予定だ。

「校長も一人ひとりをしっかり見ているというメッセージが伝わり、褒められることで学校生活への意欲につながればと思っています」(関根校長先生)

これらの取り組みの成果は数字には見えにくいものの、教員はいくつかの手応えを感じているようだ。読書量の増加や論理的な言語能力の向上は言うまでもない。この数年の進路実績の向上も、受験指導だけの成果ではなく、3年間の体系だった進路指導計画や総合学習により進路意識が高まった影響が考えられるという。

「以前は3年になって具体的な進路を考え、そ

REPORT

「総合的な学習の時間」についての感想 (卒業時アンケートより)

- 長い文章を書くという経験で、文章の構成も気にするようになった(複数)
- 文章をまとめる行為の楽しさを知った
- テキストに済ませてしまっただけで、あとから「文章力をつけるいい機会だった」と思った
- 自分の価値観、人生観を広げることができた
- 自分の将来の目標を立てる材料にすることができ、やる気も出た
- 自分で調べたことは長く記憶に残るので、知識を増やすのに役立った
- 自分の興味あることについて、自発的に調べることになるので、意欲的に学習(複数)
- 興味あることがらを調べ、プレゼンするのは楽しかったし、プレゼンのコツがわかった
- その時調べたことが面接やらなんやらのネタになる(複数)
- 真剣に向き合ってはじめて気づくことも多く、長文も書けるようになってよかった
- 面倒くさかったけど、徹夜の作業とかけっこういい思い出になった

の時点で行ける大学に行くという生徒が少なくありませんでした。今は早期から将来の目標を持つ生徒が増え、それに向けて途中で諦める生徒が少なくなったように感じます」(板谷先生)

「新世紀構想」から始まった改革はもうすぐ10年目を迎える。常に変化する生徒に対応した改善や、新任教員に対するアドグルの運営ノウハウの伝授など、取り組みむべき課題はまだありそうだ。「指導体制が確立したとき劣化が始まる」と

INTERVIEW

「医療倫理」のアドグルで学んで

■「高校入学前から医学部への進学を目指しているので、1年の学問研究では『生物の体内時計』について調べ、2年前期のアドグルでは『医療倫理』を選びました。アドグルでの僕の論文のテーマは『インフォームド Consent』です。関連する書籍を読み、患者さんに事実を話すことによって不安を増大させる危険性について考えさせられました。将来は患者さんの視点に立って考えられるような医師になりたい。目指す将来像が少し具体的になりました」(新井達也さん:写真右)

■「アドグルでは、共通の関心をもつ仲間が存在が大きな刺激になりました。高校生活は勉強と部活動に追われてとても忙しいのですが、誰も手を抜かないんです。勉強だけできるのではなく、時間をやりくりしてニュースに触れたり、斬新な視点でレポートを書いたりするのはすごいこと。根性あるな、自分も負けちゃいけないな、という気持ちで取り組みました。仲間を意識しすぎるあまり、自分の考えに自信がないと十分に発言できなかったという反省も。後期のアドグルでは自分の意見をもっと出していきたいです」(佐藤広太さん:写真左)



関根校長先生はさらなる前進に意欲的で、「総合学習のような双方向型の授業スタイルをその他の教科でも取り入れていきたい」との展望ももつ。串田先生は今後への思いをこう語る。

「ある年、卒業式直後に一人の卒業生が『人生を学ぶ学校だった』と叫んだことがあります。濃密な3年間を誇らしげにそう表現した卒業生に恥じることはない教育活動を、今後も続けていきたいと思えます」